

『バガヴァッド・ギーター』 VI.13について

山 本 和 彦

1 問題の所在

紀元前二世紀頃^①に成立した『バガヴァッド・ギーター』(*Bhagavadgīta*)はインドの古典のなかで最もよく読まれ研究されてきた文献である。しかしいまだに意味不明の箇所も少なからずあり、ヨーガ(yoga)の技法に関する箇所がそうである。本稿では、ヨーガの技法について述べられる第6章13頌について考察する。問題は、「ナーシカー・アグラ」(*nāsikā-agra*)は「鼻の先端」か「鼻の根元」かどちらなのかという点と、「鼻のアグラをよく見て」(*saṃprekṣya nāsikāgram*)という文章の意味は、実際の目で見えるのか、心で見えるのかどちらなのかという2点である。

2 『バガヴァッド・ギーター』 VI. 13

『バガヴァッド・ギーター』第6章13頌は以下の通りである。

saṃam kāyaśirogrīvaṃ dhārayann acalam sthirah/
saṃprekṣya nāsikāgram svam diśaś cānavalokayan // (BhG VI. 13)

仮に直訳をすれば、次のようになる。

まっすぐに、身体と頭と首を、不動に保たせながら、しっかりとし、自分の鼻の先端をよく見て、そして諸方向を見させない。

まず「まっすぐ(sama)に、身体(kāya)と頭(śiras)と首(grīva)を、不動(a-cala)に保たせながら(dhārayan, 使役・現在分詞)」という文章は、頭と首と身体を一直線にして、不動の姿勢を保たせるという意味であり、ヨーガの8階梯(aṅga, 段階)のうちの第3階梯であるアーサナ(āsana, 坐法)の説明である。

「しっかりとし」(sthira)で、註釈者ラーマヌジャ(Ramānuja, AD

1055-1137) は原語の *sthiraḥ* (男性・単数・主格) を *sthiram* (男性・単数・対格) と読み替えている^③。主格であれば何が「しっかりと」するのがこの文章では述べられていないが、対格であれば「まっすぐに」(*samaḥ*, 男性・単数・対格) と「身体と頭と首を」(*kāya-siro-grīvaṃ*, 男性・単数・対格) と「不動に」(*a-calam*, 男性・単数・対格) とがすべて同数・同格になり、「身体と頭と首をまっすぐに、不動に、しっかりと保たせる」という解釈が可能になる。つまりラーマヌジャは「しっかりと」とするのは「身体と頭と首」だとすると解釈する。しかし、シャンカラ (Śaṅkara, AD 700-750 ca.) をはじめ他の註釈者たちは、原語通り主格で解釈している。主格の場合「まっすぐに、身体と頭と首を、不動に保たせながら」と「しっかりと」が別の文章になり、何が「しっかりと」するのがここでは省略されていることになる。この箇所はヨーガの実修の際の姿勢が問題にされており、二つ前の詩頌 (BhG VI. 11) の「しっかりと坐」(*sthiram āsanam*) という表現を受け継いでいるものと思われる。さらに「しっかりと」(*sthira*) という表現は、ヨーガ学派の根本教典であるパタンジャリ (Patañjali) の『ヨーガ・スートラ』(*Yogasūtra*, AD 400-450頃成立)^⑤でも坐法の説明で用いられている。したがって、『バガヴァッド・ギーター』VI. 13 での「しっかりと」(*sthira*) は、「しっかりと座る」という意味であると思われる。

「自分 (*sva*) の鼻 (*nāsikā*) の先端 (*agra*) をよく見て (*samprekṣya*)」という文章の意味が、本稿のテーマである。ここでの「アグラ」(*agra*) の意味は「先端」でよいのかどうかがまず問題になる。*agra* は $\sqrt{\text{ang}}$ (動く) を動詞語根とする中性名詞であり、「先端」「頂上」「始まり」「最も優れた」などの意味がある。「自分の鼻の先端をよく見て」ヨーガを実修するのであるだろうか。原文をそのまま和訳すればこういう訳になってしまうし、従来もこの部分は「先端」と解釈されてきたのだが、鼻の先端を目で直接見ながら瞑想することは不可能である。鼻の前方なら可能かもしれない。では、ここでのアグラは「前方」なのだろうか。しかし、「鼻の前方」という現代語訳はいままでひとつもない。「よく見て」(*samprekṣya*) は、*sam-pra* $\sqrt{\text{ikṣ}}$ の連続態である。この語の意味としては、「よく見る」、「注意深く観察する」など直接的に目で見る意味と、「心で見る」、「よく考える」など目で直接見ない意味もある。この点を考えるのに第6章13頌の直前の詩頌 (VI. 12) がヒントになる。

tatraikāgraṃ manaḥ kṛtvā yatacittendriyakriyāḥ/
upaviśyāsane yuñjad yogam atmaviśuddhaye // (BhG VI. 12)

そこ(しっかりとした坐)で、マナス(意)を一点に集中して、心と
感覚の活動を制御する人は、アートマン(自己)を浄めるために、座
にすわって、ヨーガに専念すべきである。

「マナスを一点に集中し」(eka-agraṃ manaḥ kṛtvā)という表現が、「鼻
の先端をよく見て」(saṃprekṣya nāsikāgraṃ)の具体例であると考えれば、
「マナスで鼻の先端をよく見て」という解釈が可能になる。また、ここで心
(citta)と感覚(indriya)を制御するのは、マナス(manasa, 意)による一
点集中(ekāgra)であることが述べられており、次に続く文(「見させない」
の解釈のヒントにもなる。

「そして(ca) 諸方向(diś)を見させない(an-avalokayan)」は、直前
の文章中の「よく見て」(saṃprekṣya)が連続態なので、前文とつながって
おり「よく見てから、諸方向を見させない」という意味になる。「諸方向を」
(diśas)とは、「鼻のアグラ」以外の諸方向のことであろう。BhG VI. 12に
よれば、「見させない」(an-avalokayan, 使役・現在分詞)という語の行為
主体はマナス(manasa)であり、行為対象は感覚(indriya)であり、「マナ
スが感覚に見させない」という意味になる。

次に従来の研究者がどのようにこの詩頌(BhG VI. 13)を解釈してきた
のかを見る。

3 従来の研究

『バガヴァッド・ギター』の現代語訳と研究は非常に多い。すべてを網
羅することはできない。そのなかで、有名なものとしてガルベ、ヒル、エジ
ヤートン、ゼーナー、そして、最近のものであり従来とは異なる訳を提示し
ているブル、ゴットシャーク、ホワイトの現代語訳と最近の日本での和訳
を「ナーシカー・アグラ」(nāsikā-agra)の訳語に注意しながら年代順に紹
介する。

(1) Garbe (1921):

Rumpf, Haupt und Hals gerade und unbeweglich haltend, blicke er ohne
sich zu rühren auf seine Nasenspitze und schaue nach keiner Richtung hin.^⑦

ガルベは「鼻の先端」と訳している。

(2) Hill (1928):

Steadily, holding his body, head, and neck balanced and motionless, fixing his gaze on the end of his nose,* and looking not about him.^⑧

ヒルは「鼻の終わり」と訳している。鼻の終わりとは「鼻の先端」のことである。

この箇所にはヒルの注がある。

* Ś. supplies 'as it were', and says that the phrase means only 'fixing the eyesight within'. But there is no doubt that the physical posture was literally recommended.

「シャンカラは『あたかも……のように』という語を補い、そしてこの文章は『視線を内に固定して』を意味するにすぎない、と言う。しかし、疑いなく身体の姿勢（坐法）が文字通り勧められている。」

ヒルは、ここはアーサナ（āsana, 坐法）が説明されている箇所であり、「鼻の先端を見るように」という比喩表現ではなく「鼻の先端を実際に見る」とそのまま解釈すべきだと考えているようである。

(3) Edgerton (1944):

Even body, head, and neck
Holding motionless, (keeping himself) steady,
Gazing at the tip of his own nose,^⑨
And not looking in any direction,
エジャートンも「鼻の先端」と訳している。

(4) 服部正明 (1967):

「体軀（品）、頭、頸を直立・不動に、保ちつつ、端然として動かず、自己の鼻頭を凝視して、そして諸方に目をやることなく」^⑩

(5) Zaehner (1969):

[Remaining] still, let him keep body, head, and neck in a straight line, unmoving: let him fix his eye on the tip of his nose, not looking round about him.^⑪

ゼーナーも「鼻の先端」と訳している。

(6) 宇野惇 (1969):

「身体、頭、首をまっすぐに、不動に保ち、自分の鼻の先端を凝視して、他の方角に目をやらず、」^⑫

(7) Bolle (1979):

He is immobile, holding body, head, and neck straight, motionless. He rests his gaze between his eyebrows without attention to the world around him;¹³

ブールは「眉間」と意識している。

(8) 辻直四郎 (1980):

「体軀 (品) と頸と頭とを一直線かつ不動に保ちて堅固に〔坐し〕, 四方を見ることなく, [ただ] 自己の鼻頭を凝視して。¹⁴」

(9) Gotshark (1985):

Let him hold his body neck, and head erect, keeping himself steady and unmoving, not looking around but looking at the base of his nose;¹⁵

ゴットシャークは「鼻の根元」と訳している。

(10) White (1988):

With his body upright and holding his head and neck motionless, keeping himself completely steady, gazing at the root of his nose and not looking around in any direction,¹⁶

ホワイトは「鼻の根元」と訳している。

(11) 上村勝彦 (1992):

「体と頭と首を一直線に不動に保ち, 堅固〔に坐し〕, 自らの鼻の先を凝視し, 諸法を見ることなく,¹⁷」

(12) 鎧淳 (1998):

「身体, 頭, 頸を直立不動に保ちつつ, 揺がず, 己の鼻の先端を凝視し, いずれの方をも顧みず。¹⁸」

以上のように従来の研究では「ナーシカー・アグラ」(nāsikā-agra) の解釈は二種類あり, ひとつは「鼻の先端」であり圧倒的に多く, もうひとつは「鼻の根元」・「眉間」であり少数である。既に述べたように, 「鼻の先端」であれば, 実際の目で見るとか心の目で見るとかが問題になるのだが, 現代語訳にこの点を反映させることは難しい。

次に『バガヴァッド・ギーター』のなかでのこれらの問題とヨーガの実修を検討する。

4 『バガヴァッド・ギーター』のなかでの実修

『バガヴァッド・ギーター』のなかで単独で用いられる「アグラ」(agra) についての記述を見る。

yat tad agre viṣaṃ iva pariṇāme 'mṛtopamam /

tat sukhaṃ sattvikam proktam ātmabuddhiprasādam // (BhG XVIII.37)

始めは毒のようなものであり、最後にはアムリタ（不死の飲み物、薬）のようなものであり、自分の落ち着いた知性から生じる快樂は、純質的だと言われる。

viśayendriyasamyogād yat tad agre 'mṛtopamam /

pariṇāme viṣaṃ iva tat sukhaṃ rājasam smṛtam // (BhG XVIII.38)

対象と感官との結合から〔生じる〕ものであり、始めはアムリタのようなものであり、最後には毒のような快樂は、激質的だと考えられる。

yad agre cānubandhe ca sukhaṃ mohanam ātmanaḥ/

nidrālasya pramādottham tat tāmasam udāhṛtam // (BhG XVIII.39)

始めと結果におけるアートマン（自己）の当惑、睡眠、怠惰、怠慢から生じる快樂は、暗質的だと言われる。

ここでは「アグラ」は、すべて「始まり」という意味で用いられている。したがって、「鼻の始まり」から「鼻の根元」という意味を導き出すことは可能であるが、ヨーガの実修において「鼻の先端」と「鼻の根元」とが区別されているかどうかの問題になるので、この点については後に考察する。

次に『バガヴァッド・ギーター』のなかでのヨーガの実修は、感覚器官 (indriya) と外界の対象との接触を断ち、マナス (manas, 意) とアートマン (ātman, 自己, 個人主体) とが結合することであると説かれている。たとえば、以下のような詩頌がある。

yadā saṃharate cāyaṃ kūrmo 'ṅgānīva sarvaśaḥ/

indriyaṃ indriyārthebhyas tasya prajāñā pratiṣṭhita // (BhG II.58)

また亀が肢分を完全に〔引込める〕ように、感官を感官の対象から引込めれば、その人の智慧は確立する。

これ以外にも感官と外界の対象との接触を避けることを勧める表現は多くある。¹⁹

śānaiḥ śānair uparamed buddhya dhṛtigṛhītaya/

atmasamsthāṃ manaḥ kṛtvā na kiṃcid api cintayet // (BhG VI.25)

しっかりと把握された知性によって、徐々に活動をやめるべきである。
マナス（意）をアートマン（自己）に固定して、[チッタ（心）に]
何も考えさせるべきではない。

ここでは、マナス（manas）とアートマン（ātman）との結合による精神統一が言われているが、感官と対象との接触がないことが前提となっている。感官のひとつである目と外部の対象である鼻の先端とを結合させることは、『バガヴァッド・ギーター』のヨーガの実修方法からは逸脱していることになる。したがって、「ナーシカー・アグラ」が「鼻の先端」であっても、それを実際の目で見るという可能性は低い。

5 シャンカラの解釈

『バガヴァッド・ギーター』に対する最古の註釈であるシャンカラ（Śaṅkara Ācārya, AD 700-750 ca.）による解釈を検討する。

bāhyasādhanam āsanam uktam adhunā śarīradhāraṇam katham ity ucyate samam iti / samam kāyaśirogrīvaṃ kāyaś ca śiraś ca grīvā ca kāyaśīrogrīvaṃ tatsamaṃ dhārayann acalam ca / samam dhārayataś calanam sambhavaty ato viśiṇaṣṭi acalam iti / sthiraḥ sthīro bhūtvety arthaḥ / svam nāsikāgraṃ samprekṣya samyakprekṣaṇam darśanam kṛtveti vaśabdo lupto draṣṭavyaḥ / na hi svanāsikāgrasamprekṣaṇam iha vidhitsitam kiṃ tarhi cakṣuṣor dṛṣṭisamnipātaḥ / sa cāntaḥkaraṇasamādhānāpekṣo vivakṣitaḥ / svanāsikāgrasamprekṣaṇam eva ced vivakṣitam manas tatraiva samādhīyeta nātmani / ātmani hi manasaḥ samādhānam vaksyaty *atmasamsthāṃ manaḥ kṛtveti* (VI.25) / tasmād ivaśabdaloṇākṣṇor dṛṣṭisamnipāta eva samprekṣyety ucyate / diśaś cāvalokayan diśaṃ cāvalokanam antarā'kurvann ity etat // (Śaṅkarabhāṣya ad BhG VI.13=Ānandagīrivyākhyā, pp. 296⁷-297¹¹)

〔身体の〕外部の成就法としての坐法は〔すでに〕述べられた。いまは、「身体を保持をどのようにするのか」が述べられる。「まっすぐに」と。「身体と頭と首をまっすぐに」と。「身体と頭と首」とは、身体と頭と首の後ろ側であり、それをまっすぐに保持させて、不動に〔するという意味である〕。〔身体・頭・首を〕まっすぐに保持させる

人の「身体が揺れて」動く可能性がある。だから「不動」[「ということば」]が含まれているのである。「しっかり」とは、「しっかりしてから」という意味である。「自分の鼻の先端をよく見て」とは、「正しく見る経験をするように」の「ように」ということばの省略と見られるべきである。なぜなら「自分の鼻の先端をよく見ること」はここでは意図されていないからである。どうしてなのか。両目に視線を向けること「が意図されている²¹⁾」。またそれ(「自分の鼻の先端をよく見ること」)は内官(マナス)の「アートマンにおける」瞑想が意図されている。もし、「自分の鼻の先端をよく見ること」そのものが意図されているとすれば、マナスが瞑想するのはアートマンにおいてではなくなってしまう。実際にアートマンにおけるマナスの瞑想が言われているのである。「マナスをアートマンに定めて」(BhG 6.25)と。それゆえ、「ように」ということばの省略によって、両目に視線を向けることこそが「よく見て」であると言われる。「かつ、諸方向を見させることなく」とは、「かつ、諸方向の観察をその間にしない」というのがこれ(の意味)である。

シャンカラは、「鼻の先端をよく見る」とは比喩表現であり、両目に視線を向けることだと註釈する。ここでは、マナスが外界の対象との接触を断ち、内部のアートマンと結びつくことであると言う。「両目において」(cakṣuṣoḥ, 中性・両数・於格)の意味がまた問題である。ブル(Bolle 1979)、ゴットシャーク(Gotshark 1985)、ホワイト(White 1988)などは、シャンカラ註の「両目において」(cakṣuṣoḥ)を両目の間、つまり眉間と解釈したようである。シャンカラの言う「両目において」が眉間を意図しているのかどうかは不明だが、ヨーガの実修書において鼻の根元である眉間は、「両目の間²²⁾」ではなく、「両眉の間²³⁾」と表現されることが多い。眉間に意識を集中させることは、ヨーガの各実修書のプラーナ・アーヤーマやダーラナーの説明によって支持される²⁴⁾。しかし、シャンカラ註に対して復註を書いたアーナンダギリ(Ānandagiri, 14世紀頃)は「両目において」を右目と左目との両目においてと、そして「ナーシカー・アグラ」を鼻の端(anta)²⁵⁾と解釈している。

6 『ヨーガ・スートラ』とその註釈書における実修^①

『ヨーガ・スートラ』に対するヴァヤーサ (Vyāsa, AD 500 ca.) の註釈書『ヨーガ・バーシャ』(Yogabhāṣya) I.35でも鼻の先端に心 (citta) を向けることが述べられており、鼻の先端を実際の手で見るといふ表現はない。さらに、実際の手で何かを見るという表現や考えすらも『ヨーガ・スートラ』とその註釈書にはない。逆に、感官を対象と結びつけないことを勧める表現は多くある。

『ヨーガ・スートラ』によれば、ヨーガの実修には8つの段階がある。①ヤマ (yama, 禁戒)^②ニヤマ (niyama, 勸戒)^③アーサナ (āsana, 坐法)^④プラナー・アーヤマ (prāṇa-ayama, 調息)^⑤プラティ・アーハーラ (pratyāhāra, 制感)^⑥ダーラナー (dhāraṇā, 凝念)^⑦ディヤーナ (dhyāna, 静慮)^⑧サマーディ (samādhi, 三昧) の8つの段階 (āṅga) がある。①から⑤までは外的段階 (bahir-āṅga) であり、⑥から⑧までは内的段階 (antar-āṅga) である。このなかで、特にいま問題になっているダーラナー (dhāraṇā, 凝念) について『ヨーガ・スートラ』と『ヨーガ・バーシャ』の記述を見る。

deśabandhaś cittasya dhāraṇā // 1 // (YS III.1)

nābhicakre hṛdayapuṇḍarīke mūrdhani jyotiṣi nāsikāgre jihvāgra ity evam adīṣu deśeṣu bahye vā viśaye cittasya vṛttimatreṇa bandha iti dhāraṇā // (YBh ad YS III.1. = KSS 201, p. 314)

凝念とは、心の〔一定の〕場所におけ結合である。(YS III.1)

凝念とは、臍・心臓の蓮華・頭・光り輝くところ・鼻の先端・舌の先端などの場所における、あるいは外の対象における、心の作用のみとの結合である。

「鼻の先端」を見るのは、実際の手ではなく心 (citta) であることが述べられている。ヴァヤーサの述べる「一定の場所」は、「臍」・「心臓の蓮華」・「頭」・「光り輝く場所」・「鼻の先端」・「舌の先端」などであるが、スヴァートマーラーマ (Svātmārāma, 16,7世紀頃) は『ハタヨーガ・プラディーピカー』(Hathayoga-pradīpikā) のなかで、特に「眉間」を勧めており、ここにマナスを集中させることは、不死への方法であると述べている。鼻の根元である眉間は、シヴァ (Śiva) 神の住处であり、神聖な場所である。また、

ここには第6チャクラであるアージュニャー・チャクラ (ajñā-cakra) がある。

また、外の対象とは、ヴァーチャスパティ・ミシュラ (Vācaspati Mīśra, AD 850 ca.) の註釈書『タットヴァ・ヴァイシャーラデー』 (*Tattva-vaiśārādī*) によれば、ヒラヌヤガルバ、ヴァーサヴァ、プラジャーパティなど実際の目で見えない清浄なものである。

ヨーガの8つの段階に照らして、いま問題にしている『バガヴァッド・ギーター』VI. 13を考えれば、前半部分の「まっすぐに、身体と頭と首を、不動に保たせながら、しっかりとし」までは、アーサナ (āsana, 坐法) のことであることがわかる。後半部分の「自分の鼻の先端をよく見て、そして諸方向を見させない」を内的段階のダーラナー (dhāraṇā, 凝念) のことだと解釈すれば、目ではなく心で鼻の先端もしくは鼻の根元を見るという意味になる。「ナーシカー・アグラ」は「鼻の先端」なのか「鼻の根元」 (=眉間) なのかどちらなのであろうか。これに対して、『ヨーガ・スートラ』に対する註釈書であるヴィジュニャーナビクシュ (Vijñānabhikṣu, 16世紀後半頃) の『ヨーガ・ヴァールティカ』 (*Yoga-vārttika*) が解答を与えている。

yathā gāruḍe-

prāñnābhyam hṛdaye vā 'tha tṛṭṭīye ca tathorasi /

kaṅthe mukhe nāsikā 'gre netrābhrūmadhyamūrdhvasu //

kiṃcīt tasmāt paraśmiṃś ca dhāraṇā daśakṛttitāḥ / (*Yogavārttika ad* YS III.1. = KSS 110, p. 281²⁷⁻³⁰)

『ガルダ・プラーナ』におけるように、

最初に臍、そして心臓、三番目に胸、喉、舌の先、鼻の先端、目、眉間、頭、そしてどこかその他の場所において、[心を結びつける] 凝念は10であると言われる。

『ヨーガ・ヴァールティカ』が引用する『ガルダ・プラーナ』 (*Garuḍapurāṇa*) によれば^⑬、「鼻の先端」 (nāsikā-agra) と「眉間」 (bhṛūmadhya) は異なる場所であることがわかる。このことから、「ナーシカー・アグラ」は、「鼻の先端」が妥当な解釈ということになる。

7 ま と め

『バガヴァッド・ギーター』のなかでのアグラ (agra) は、すべて「始ま

り」という意味で用いられている。しかし、アーナンダガリの註釈や『ヨーガ・ヴァールティカ』などの記述から、「ナーシカー・アグラ」は「鼻の先端」という意味が適当であると思われる。さらに、「自分の鼻の先端をよく見る」という表現は、シャンカラの解釈する通り比喩表現であり、直訳の意味では解釈できない。BhG VI.13, c-d 句は、『ヨーガ・バーシャ』などヨーガ学派の文献を見る限り、ヨーガの第6階梯であるダーラナー (dharaṇā, 凝念) のことが述べられていると考えられ、「心を鼻の先端に結びつける」という意味であると思われる。また第3階梯のアーサナ (āsana, 坐法) のことが述べられているとしても、「鼻の先端」と「眉間」とは両方とも心 (citta) を集中させる場所のことであり、外部の対象を見る場合でも、心を向けるだけであり、外部の対象を直接目で見るという考えは見あたらず、心がマナス (manas, 意) を通して対象を見るという意味であると思われる。さらに、ヨーガの各階梯は連続したものであり、それぞれの段階をはっきりと分けることは不可能であり、第3階梯のアーサナと第6階梯のダーラナーで異なった観法を用いることはヨーガ実修の連続性からも不自然である。したがって、「自分の鼻のアグラをよく見る」 (samprekṣya nāsikāgraṃ svam) に関しては、「自分の鼻の先端を心でよく見る」という解釈が妥当であると思われる。結論として、以下の訳を提案する。

「身体と頭と首をまっすぐ不動に保たせながら、しっかり〔坐〕して、自分の鼻の先端を〔意を通して心で〕よく見て、かつ一切の〔外部の〕方向を〔マナスが感官に〕見させることなく。」 (BhG VI. 13)

註

- ① 徳永宗雄 1988, p. 100. 鎧淳 1998, p. 256. しかし、辻直四郎 1980 (pp. 322-324) によれば、およそ西紀一世紀。
- ② 『バガヴァッド・ギーター』が収められている『マハー・バーラタ』 (Mahābhārata) のなかで述べられるヨーガの技法については、木村泰賢 1916, pp. 198-204. Frauwallner 1953, pp. 97-146., 服部正明 1988, pp. 58-67., Banerji, S. C. 1995, pp. 42-47. など参照。『マハー・バーラタ』第12章「寂靜章」 (Śānti-parvan) 所収「解脱法」 (Mokṣa-dharma) については、中村了昭1982, Aramaki 1989, 茂木秀淳1993a-1999 など参照。
- ③ kāyaśiroṅṛvaṃ, samam, acalaṃ, sāvāśrayatayā* sthiraṃ dharayan, diśaś cāvalokayan, svam nāsikāgraṃ samprekṣya, ... // (Rāmānujabhaṣya, p. 546²⁷⁻²⁸) 「上半身とともに、身体と頭と首を、まっすぐに、不動に、しっかりと

保たせながら、諸方向を見させず、自分の鼻の先端をよく見て、……」
 **Tātparyacandrikā* p. 382⁶に従って、-taya を -tayā に訂正。

- ④ śucau deṣe pratiṣṭhāpya sthiram āsanam ātmanaḥ / nātyucchritam
 nātinīcaṃ cailājīnakuśottaram // (BhG VI.11) 「布、皮、クシャ草が上にある
 清潔な場所において、アートマン（自分）のために高過ぎず、低過ぎないしっか
 りとした坐を設定して、」
- ⑤ 中村元 1996, p. 69.
- ⑥ sthirasukham āsanā// (YS II.46 = KSS 201, p. 298) 「坐法とは、しっかりと
 し快適なものである。」
- ⑦ Garbe 1921, p. 109.
- ⑧ Hill 1928, p. 157.
- ⑨ Edgerton 1944, p. 33.
- ⑩ 服部正明 1967, p.297.
- ⑪ Zaehner 1969, p. 224.
- ⑫ 宇野惇 1969, p. 166.
- ⑬ Bolle 1979, p.73.
- ⑭ 辻直四郎 1980, p. 108f.
- ⑮ Gotshalk 1985, p. 25.
- ⑯ White 1988, p. 89.
- ⑰ 上村勝彦 1992, p. 63f.
- ⑱ 鏡淳 1998, p. 85.
- ⑲ BhG II.58, II.61, II.67, II.68, IV.26, IV.27, V.21, V.27, V.28, VI.4,
 VI.12, VI.13, VI.21, VIII.8, VIII.12 など。
- ⑳ *Śāṅkara-bhāṣya*, pp. 296-297. Cf. *Tātparyacandrikā* pp. 382-383; *Rāmānuja-bhāṣya*,
 p. 544¹⁻⁸.
- ㉑ アーナンダギリの註釈; *dr̥ṣṭisamnipāto dr̥ṣṭeś cakṣuṣo rūpādīviṣayapravṛtti-
 rāhityam / (Ānandagīrivyākhyā p. 297¹⁵⁻¹⁶)* 「『視線を向ける』とは、両目におい
 て、視線からの色などの対象の出現が排除されることである。」
- ㉒ cakṣuṣor madhye, cakṣuṣor madhyam; cakṣuṣor antare, cakṣuṣor antaram など。
- ㉓ bhruvor madhye, bhruvor madhyam; bhruvor antare, bhruvor antaram など
- ㉔ 註26参照。
- ㉕ paśyed bhruvor aṃtaram (HYP I.37 = *Hāṭhayogaṇḍīpikā* p. 6) 「眉間（みけ
 ん）を凝視せよ。」（佐保田鶴治 1973, p. 182)
dr̥ṣṭir bhruvor madhye (HYP II.40 = *Hāṭhayogaṇḍīpikā* p.19) 「視線がミケン
 にある間は」（佐保田鶴治 1973, p.206)
bhruvor aṃtargatā dr̥ṣṭir (HYP III.32 = *Hāṭhayogaṇḍīpikā* p. 33) 「視線を眉

間にすえる。」(佐保田鶴治 1973, p. 228)

bhrudhyānam (HYP IV.79 = *Haṭhayogapradīpikā* p. 58) 「眉間に精神を集中する観想は」(佐保田鶴治 1973, p. 276)

paśyan bhruvor antaram (GS II.7 = *Gheraṇḍasaṃhitā* p. 13) 「眉間を凝視する。」(佐保田鶴治 1978, p. 45)

bhruvor madhye gata dṛṣṭiḥ (GS II.23 = *Gheraṇḍasaṃhitā* p.16) 「眉間に視線をすえる。」(佐保田鶴治 1978, p.51)

bhruvor madhye nirīkṣayet (GS III.7 = *Gheraṇḍasaṃhitā* p. 20) 「眉間を凝視すべし。」(佐保田鶴治 1978, p. 62)

bhruvor madhye gata dṛṣṭir (GS III.27 = *Gheraṇḍasaṃhitā* p. 24) 「視線を眉間にそそぐ。」(佐保田鶴治 1978, p. 68)

manāś ca bhruvor antaram (GS V.83 = *Gheraṇḍasaṃhitā* p. 49) 「ここを眉間におく。」(佐保田鶴治 1978, p.117)

urdhvaṃ nirīkṣya bhrumadhyam (ŚS III.85 = *Śivasamhitā* p. 38) 「うわ眼使いに眉間を凝視しながら」(佐保田鶴治 1978, p. 215)

bhruvor antargatam dṛṣṭim (ŚS IV.31 = *Śivasamhitā* p.47) 「眉間を凝視し」(佐保田鶴治 1978, p. 230)

bhrūmadhye dṛṣṭi mātreṇa (ŚS V.51 = *Śivasamhitā* p. 61) 「眉間への注視だけで」(佐保田鶴治 1978, p. 253)

㉔ dakṣiṇetaracakṣuṣor yā dṛṣṭis tasyā bāhyād viśayād vaimukhyenāntar eva saṃnipatanam atra svakṛtyam nāsikāgraṃ nāsikāntam saṃprekṣyati vivakṣitam ity arthaḥ/ (*Ānandagirivyaḥyā* p. 297²⁰⁻²¹) 「右と別(左)との両目において、視線を外部の対象から背けることによって、内部のみに向けることが、ここでは自分自身の鼻のアグラ(先端)である鼻の端(anta)を『よく見て』の意図である、という意味である。」

㉕ ヴァヤーサの『ヨーガ・バーシャ』に対する註釈書である『ヨーガ・ストトラ・バーシャ・ヴィヴァラナ』(*Yogasūtrabhāṣyavivarāṇa*)については、シャンカラの真作かどうか不明であるので、ここでは取り上げなかった。なお、この問題に関する研究書、論文については、中村元1996, pp.51-53参照。

㉖ 中村元 1996, p.70.

㉗ nāsikāgre dhārayato 'sya yā divyagandhasaṃvit sā gandhapravṛttiḥ/ (YBh ad YS I.35 = KSS 201, p.117) 「鼻の先端に心を集中させる人には、神々しい香りの感覚という香りの出現がある。」

㉘ Cf. YS II.54.

㉙ yamaniyamāsanapraṇāyamapratyāharadhāraṇādhyanasamādhayo 'ṣṭāv aṅgani // (YS II.29 = KSS 201, p. 273) Cf. 木村泰賢 1916, pp. 212-224., 岸本英夫 1958, pp. 162-189., 保田鶴治 1973, pp. 101-102., 立川武蔵 1988, pp. 78-91., 服

部正明 1988, pp. 65-67.

- ③② *ahiṃsāsatyāsteyabrahmacaryāparigraha yamaḥ* // (YS II.30 = KSS 201, p. 274) 「禁戒 (yama) とは, 不殺生 (ahiṃsa), 正直 (satya), 不盗 (asteya), 梵行 (brahmacarya, 不邪淫), 無所有 (aparigraha) である。」
- ③③ *śaucasamtoṣatapaḥsvādhyāyēśvarapraṇidhānāni niyamāḥ* // (YS II.32 = KSS 201, p. 282) 「勸戒 (niyama) とは, 清浄 (śauca), 満足 (samtoṣa), 苦行 (tapas), 読誦 (svādhyāya), 自在神への祈念 (īśvara-praṇidhāna) である。」
- ③④ *sthiraśukham āsanam* // (YS II.46 = KSS 201, p. 298) 「坐法 (āsana) とは, しつかりとし (sthira), 快適なもの (sukha) である。」
- ③⑤ *tasmin sati śvāsapraśvāsayor gativicchedaḥ praṇāyamaḥ* // (YS II.49 = KSS 201, p. 301) 「調息とは, これ (坐法の完成) があるときに, 呼息と吸息との流れを絶つことである。」
- ③⑥ *svaviśayāsamprayoge cittasvarūpānukāra ivendriyāṇaṃ pratyāhāraḥ* // (YS II.54 = KSS 201, p. 309) 「制感とは, 諸感官が, 自らの対象と結びつかないとき, 心そのものようになることである。」
- ③⑦ *deśabandhaś cittasya dharaṇā* // (YS III.1 = KSS 201, p. 314) 「凝念とは, 心の [一定の] 場所における結合である。」
- ③⑧ *tatra pratyayaikatānatā dhyānam* // (YS III.2 = KSS 201, p. 314) 「静慮とは, そこ (凝念で心と結合した場所) で想念がひとすじに伸びることである。」
- ③⑨ *tadevārthamātranirbhāsaṃ svarūpaśūnyam iva samādhiḥ* // (YS III.3 = KSS 201, p. 315) 「三昧とは, それ (凝念) がまさに対象としてのみ現れ, それ自身が空のようになることである。」
- ④⑩ *bhruvor madhye śivasthānaṃ manas tatra viltiyate/ jñātavyaṃ tatpadam turyaṃ tatra kalo na vidyate* // (HYP IV 47 = *Haṭhayogapradīpikā*, p. 54)
「眉間においてシヴァの住処がある。そこで, マナスが吸収される。それは, 第四位 (三昧) として知られるべきである。そこでは, 死は存在しない。」
- ④⑪ 『ガルダ・プラーナ』ではチャクラは次のように言われている。
mūlādhāraḥ svādhiṣṭhānaṃ maṇipūrakam eva ca /anāhatam viśuddhyākhyam ajñā śaḍcakram ucyate // (GP XV. 72 = *Garuḍapurāṇa*, p. 149) *mūlādhāre liṅgadeśo nābhyāṃ hṛdi ca kaṅṭhake / bhruvor madhye brahmarandhre kramacakraṇi cintayet* // (GP XV.73 = *Garuḍapurāṇa*, p.149) 「ムーラ・アーダーラ」, 「スヴァ・アディシュターナ」, 「マニ・プーラカ」, 「アナーハタ」, 「ヴィシュッディ」と呼ばれるもの, 「アージュニャー」が6つのチャクラと言われる。尾骨, 生殖器, 臍, 心臓, 喉, 眉間, 頭上という順序でチャクラを瞑想すべきである。
- ④⑫ *atrāpi purāṇam -praṇāyāmena pavanaṃ pratyāhāreṇa cendriyam / vaśīkrītya tataḥ kuryyāc cittasthānaṃ śubhāśraye* // *śubhāśrayaḥ = bhāya hiraṇyagarbha-vāsavaprajāpatiḥ*... // (*Tattvavaiśārādī* ad YS III.1 = KSS 110, p.

282⁷⁻¹⁰) 「この場合また, [ヴィシシュヌ・] プラーナが [次のように言う]。調息によって呼吸が, そして制感によって感官が支配される。それから, 心の固定を清浄な場所に行くべきである。清浄な場所とは, 外部のヒラヌヤガルバ, ヴァーサヴァ, プラジャーパティなどである。」

④3 *Garuḍapurāna* 1911 は要約版 (sāra-uddhāra) のためこの文章はない。

参考文献 1 (テキスト)

Ānandagirivyaḥyā (Ānandagiri)

Śrīmadbhagavadgītā with the Commentaries Śrīmat-Śaṅkarabhāṣya with Ānandagiri; Nīlakaṅṭhi; Bhāṣyotkarśadīpikā of Dhanapati; Śrīdharī; Gītārthasaṃgraha of Abhinavaguptācārya and Gūḍhārthadīpikā of Madhusūdana with Gūḍhārthattvaḷoka of Śrīdharamadattaśarma (Bachchaśarma), Edited by Wasudev Laxman Śāstrī Paṅśkar, Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt Ltd., 1996.

Bhagavadgītā

The Mahābhārata, vol. 7. The Bhīṣmaparvan. Critically Edited by S. K. Belvalkar, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1947.

Garuḍapurāna (Navanidhirāma or Naunidhirāma)

The Sacred Books of the Hindus, vol. IX: The Garuḍa Purāna (Sāroddhāra). Edited by Major B. D. Basu, Allahabad: The Pāṇiṇi Office, 1911.

Gheraṇḍasamhitā

The Sacred Books of the Hindus, vol. XV, Part II: The Yoga Sastra: Gheranda Samhitā, Edited by Major B. D. Basu, Allahabad: The Pāṇiṇi Office, 1914.

Hathayogapradīpikā (Svātmārāma)

The Haṭha Yoga Pradīpikā. Translated into English by Pancham Sinh. Allahabad: The Pāṇiṇi Office, 1914-15.

Mokṣadharmā

The Mahābhārata, vol. 15, The Śāntiparvan Part III: Mokṣadharmā. Critically Edited by S. K. Belvalkar, Poona; Bhandarkar Oriental Research Institute, 1954.

Rāmāmujaḥbāṣya (Rāmānuja)

The Bhagavad-Gītā with Eleven Commentaries. 3 vols. Critically Edited by Shastri Gajanana Shambhu Sadhale, Delhi: Parimal Publications, 1985.

Śaṅkarabhāṣya (Śaṅkara)

See *Ānandagirivyaḥyā*.

Śivasamhitā

The Sacred Books of the Hindus, vol. XV, Part I: The Yoga Sastra: Siva

Samhita, Edited by Major B. D. Basu. Allahabad : The Paṇiṇi Office, 1914.

Tattvavaiśarādī (Vācaspati Miśra I)

Śaṃkhya Yogadarśana or *Yogadarśana* of Patañjali with the Scholium of Vyāsa and the Commentaries *Tattva Vaiśarādī*, *Pātañjala Rahasya*, *Yogavārtika* and *Bhāsvatī* of Vācaspati Miśra, Rāghavananda Sarasvatī, Vijñāna Bhikṣu & Hariharānandāranya. Edited by Sri Gosvami Damodara Sastri. Kashi Sanskrit Series 110, Varanasi : Chaukhambha Sanskrit Sansthan, 1935.

Tatparyacandrikā (Vedāntadeśika)

Śrīmadbhagavadgītā. Śrīrāmānujabhāṣyaṇa, tadvyākhyayā, Śrīkavitārkikasīṃha Sarvatantrasvatāntra Śrīmadvedāntadeśikaviracitayā Tatparyacandrikayā, Śrīśaṅkarabhāṣyaṇa, Śrīmadānandatīrthabhāṣyaṇa, Jayatīrthamuniviracitayā tadvyākhyayā ca anugataṃ. Vedāntagrantharatnamālā 2. 1910.

Yogabhāṣya (Vyāsa)

Pātañjalayogadarśana of Maharṣi Patañjali with The Commentary of Vyāsa and a Hindi Gloss by Svami Sri Brahmālina Muni, Kashi Sanskrit Serites, 201, Varanasi : The Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1970.

Yogasūtra (Patañjali)

See *Yogabhāṣya*.

Yogavārttika (Vijñānabhikṣu)

See *Tattvavaiśarādī*.

参考文献 2 (歐文)

Aramaki, N. (荒牧典俊)

1989: "The Formation of the Mokṣadharmā Chapter of the Śāntiparvan of the Mahābhārata", 『藤田宏達博士還暦論文集』平樂寺書店, 京都, pp. 89-122.

Banerji, S. C.

1995: *Studies in Origin and Development of Yoga*. Calcutta : Punthi Pustak.

Bolle, K.

1979: *The Bhagavadgītā*. Berkeley: University California Press.

Edgerton, F.

1944: *The Bhagavad Gītā*, pt. 1 & 2. Harvard Oriental Series, vol. 38 & 39. Cambridge, Mass. : Harvard University Press. Repr. 1978.

Frauwallner, E.

1953: *Geschichte der indischen Philosophie*, Bd. I, Salzburg.

Garbe, R.

1921: *Die Bhagavadgītā* ; Aus dem Sanskrit übersetzt und mit einer Einleitung

über ihre ursprüngliche Gestalt, ihre Lehren und ihr Alter versehen.
2., verb. Aufl., Leipzig.

Gotshalk, R.

1985: *Bhagavad Gītā*; Translation and Commentary. Delhi: Motilal Banarsidass.

Hill, W. D. P.

1928: *The Bhagavadgītā*; Translated from the Sanskrit with an Introduction.
London: Oxford University Press.

Hopkins, E. W.

1901: "Yoga-technique in the Great Epic", *Journal of the American Oriental Society*, 22. pp.333-379.

Rukmani, T. S.

1983: *Yogavārttika of Viṅṇānabhikṣu*. Vol. II Sadhanapāda. Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd.

1987: *Yogavārttika of Viṅṇānabhikṣu*. Vol. III Vibhūtipāda. Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd.

Sastri, Mahadeva Alladi

1897: *The Bhagavad Gīta*; With the Commentary of Sri Sankaracharya.
Samata Edition, Madras: Samata Books, 1979.

White, D.

1988: *The Bhagavad Gītā*; A New Translation with Commentary. American University Studies Series VII, Theology and Religion, vol. 39. New York: Peter Lang Publishing Inc.

Woods, J. H.

1914: *The Yoga-System of Patañjali*. Harvard Oriental Series, vol. 17, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Zaehner, R. C.

1969: *The Bhagavad-Gītā*; with a Commentary based on the Original Sources.
Oxford University Press.

参考文献 3 (日本語)

宇野惇

1969: 「バガヴァッド・ギーター」, 『世界の名著』 1, 中央公論社, 東京

上村勝彦

1992: 『バガヴァッド・ギーター』 岩波文庫, 東京

岸本英夫

1958: 『宗教神秘主義』 大明堂, 東京

木村泰賢

- 1916：『印度六派哲学』、『木村泰賢全集』第2巻，大法輪閣，東京，改訂版
1968

佐保田鶴治

- 1973：『ヨーガ根本教典』平河出版社，東京
1978：『続・ヨーガ根本教典』平河出版社，東京

高木神元

- 1991：『古典ヨーガ体系の研究』高木神元著作集1，法蔵館，京都

竹内良英

- 1992：「原始仏教における坐法」、『パーリ学仏教文化学』第5号，pp. 55-73

立川武蔵

- 1988：『ヨーガの哲学』講談社現代新書，東京

辻直四郎

- 1980：『バガヴァッド・ギーター』講談社，東京

徳永宗雄

- 1988：「ヴィシヌ教諸派」、『インド思想2』岩波講座・東洋思想，第六巻，
岩波書店，東京

中村元

- 1996：『ヨーガとサーンキヤの思想』、『中村元選集〔決定版〕』第24巻，春秋
社，東京

中村了昭

- 1982：『サーンキヤ哲学の研究—インドの二元論—』大東出版社，東京

服部正明

- 1967：「バガヴァッド・ギーター」、『ヴェーダ・アヴェスター』（世界古典文
学全集3）筑摩書房，東京
1988：「インド思想史（二）」、『インド思想2』岩波講座・東洋思想，第六巻，
岩波書店，東京

荒木秀淳

- 1993a：「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究（Ⅰ）—」『信州大
学教育学部紀要』第78号，pp. 59-70.
1993b：「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究（Ⅱ）—」『信州大
学教育学部紀要』第79号，pp. 117-130.
1994a：「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究（Ⅲ）—」『信州大
学教育学部紀要』第81号，pp. 85-98.
1995a：「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究（Ⅳ）—」『信州大
学教育学部紀要』第84号，pp. 69-81.
1994b：「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究（Ⅴ）—」『密教文

化』第189号, pp. 91-79.

1995b: 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究 (VI) —」『信州大学教育学部紀要』第85号, pp. 103-116.

1995c: 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究 (VII) —」『密教文化』第192号, pp. 98-76.

1995d: 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究 (VIII) —」『信州大学教育学部紀要』第86号, pp. 109-124.

1996: 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究 (IX) —」『信州大学教育学部紀要』第89号, pp. 75-85.

1998a: 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究 (X) —」『信州大学教育学部紀要』第93号, pp. 67-78.

1998b: 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究 (XI) —」『信州大学教育学部紀要』第94号, pp. 35-46.

1999b: 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadarma-parvan 和訳研究 (XII) —」『信州大学教育学部紀要』第96号, pp. 23-24.

鑑淳

1998: 『完訳バガヴァッド・ギーター』中公文庫, 東京

(本学専任講師 仏教学)